

芸大通信

2004年6月発行
Vol.002

京都市立芸術大学広報誌

KUJANUEM

CONTENTS

学 長 挨 拶・芸術について

日本伝統音楽研究センター・音楽・人間・ルーツ

国 際 交 流・文化環境の活性化ー文化遺産保存のためにー

芸 術 資 料 館・新収蔵品展にちなんで

音 楽 学 部・アルド・サルヴァーニョ氏による声楽公開レッスン

国 際 交 流・文学からの発想〜フランス国立高等装飾美術学校との交流〜

卒 業 生 寄 稿・漆工漆交

芸術について

学 長 中 西 進



J・E・ハリソンの「古代祭式と芸術」は芸術の始原について、ないしは芸術とは何かを問うに際して、今日でもなお、学ぶべき古典であろう。

この中で、ハリソンは古代祭式から芸術への移行の歴史を具体的にたどってみせた。例えば魔法踊りは、高く飛び上がれば高いほど、その年の麻は高く伸びる、その成長を祈るところから始まったという。

そしてまた、メキシコのタラフマレ族にあっては「働く」ということば(nolávoa)が同時に「踊る」という意味をもつことから、「踊り」の数がそのまま彼の社会的重要性の尺度になる、とする。このことは、祭式と芸術と人生との基本的な関与をも示唆するであろう。人類の歴史の普遍的な構造を示すものといってよい。

ところで、この構造を日本にあてはめて考えるとすると、その場合のキータームは「あそぶ」(遊)だと思われる。

本来「あそぶ」とはアソになることであり、アソはウソと同語であるように、ほんやりした状態を意味する。

古代人は、音楽を奏することで、このトランス状態を作り出した。目的は、トランスの中に神託が降されることを願う点にあった。音楽の始原がこの神祭りにあることはいうまでもないが、「おどり」(上下運動)も「まひ」(円運動)も精神のトランスを実現するための所作であった。舞踊の始原も祭式の「あそび」にあった点、ハリソンが参照したギリシアとまったくひどしい。

ところで、ハリソンが祭式から芸術へと移行したと言うのが誤りでないにしても、なお歴史的認識の弊害も指摘しなければならないだろう。移行しつつも、なお現存するという、ものの認識が必要である。

現代の最先端を行く舞踊にしても、また音楽のみならず、絵画、彫刻、広く芸術一般におよんで、形体や様式は変わっていても、なお祭式を保有するところにこそ、芸術が存在するにちがいない。祝祭性を除外して芸術は成り立ちえないと私は信ずる。

心のトランスに神を迎える働きの中に、芸術があるとすれば、芸術とは、人間に必須な神との対話の比喩ではないか。

日本語の「あそび」は今日誤解されて、はなはだ評判が悪いが、正当な意味において、芸術は「あそび」の上に成り立つ。「あそび」を人間の条件と考えたのが、G・カイワである。

ハリソンが祭式と芸術のほかにもう一つ、人生というタームを加えた意味も、そこにあったと思われる。

音楽・人間・ルーツ

日本伝統音楽研究センター初代所長 廣瀬 量平



廣瀬 量平
日本伝統音楽研究センター初代所長
(平成12年4月～平成16年3月在任)

NHK交響楽団が毎月発行している雑誌「フィルハーモニー」を見ていたら、「ルーツを持たない者は本物を作ることは出来ない」という見出しに目が止まった。

それは、この楽団の定期公演の指揮者、ジュン・メルクルさんのインタビューである。聞き手は若い、といっても40歳近い日本の作曲家で、現在パリ、東京を拠点として作曲活動をしているという。仮にA君と言おう。

メルクル：「(前略)…ルーツを持っていない者は本物を作ることができません。」

A：「ヨーロッパ大陸にはいろいろな民族が隣り合って存在しているので、よりルーツを意識されるのですが、日本のように島国だとあまりルーツというものを意識する機会がないのです。」

メルクル：「ルーツとは血だけではなく、もっと幅の広いもので、そこには多くのことが包括的に含まれるのです。…(中略)…ですからグローバリゼーションとは大きな危険性をはらんだ考え方だと私は考えています。確かにそこから新しいアイデアは生まれてくることでしょう。でもそこには常にはっきりした根拠が必要です。」

メルクルさんは、ドイツ人の父と日本人の母を持つミュンヘン生まれ。ドイツ各地やオーストリアのウィーン歌劇場でも大活躍している45歳。2005年からはフランスのリヨン歌劇場の音楽監督が定まっている。

彼は自国の作品だけを演奏すべきだと言っているのではない。自らの根を自覚した者でなくては他の文化を本当に理解できない、と強く主張しているのだ。

メルクルさんは「多様性をも容認するグローバリゼーションでなくてはならないのです。」と言いつつ、根なし草をはっきり戒めているのである。

それにつけてもこのA君の心の貧しさ、恥ずかしいほどの無知、そして人間としての浅さ。

西洋音楽畑に育って、A君のような人々の中にいた私が、「本物」を目指した時、ごく自然にメルクルさんのようなことを悟った。京都に日本伝統音楽研究の拠点を作る必要を感じたわけもそこにある。しかしそれは必ずしも邦楽界のためではなく、日本の音楽全体を考えてのことであった。

欧米で自作が演奏されている時も、私はいつもそのことを考えていた。

その後、様々な機会にこの企画を説明し、幸いにも多方面の賛同を得、それが大きな盛り上がりとなって、日本伝統音楽研究センターが、この大学の中に設立されることになり、2000年という節目の年に開設された。

今やこのセンターも5年目に入ったが、この存在が国際日本文化研究センターや京大人文学研究所などと並んで、京都に在りつつ日本文化全体に大きな役割を果たすにちがいないと信じている。

文化環境の活性化－文化遺産保存のために－ ～日伊世界遺産研究会報告会～



「チェルトーザ・ディ・ボンティニャーノ」
14世紀に建てられた修道院。現在はシエナ大学のゲストハウスとして使われている。
シンポジウム2003で京都市立芸術大学メンバーの宿舎になった。

文化環境の活性化－文化遺産保存のために－

会場／京都アスニー
定員／各日 先着70名
申込方法／要予約(申込先:京都アスニー)
受講料／無料

■日程

6月5日(土)

「音楽の東西－比較美的に見た
音楽の存在形態の本質的差違と無形文化遺産の意義」
(京都市立芸術大学音楽学部教授 龍村あや子)

「地域社会における日本の固有文化の伝承
－死霊の葬送儀礼としての盆踊りをめぐって－」
(京都市立芸術大学日本伝統音楽センター所長 吉川周平)

6月19日(土)

「文化財の修復と模造作成の意義
－正倉院宝物を例に－」
(京都市立芸術大学美術学部教授 木村法光)

「アジアにおける宗教建造物の装飾彩色・
壁面の保存修復と人材育成」
(京都市立芸術大学美術学部非常勤講師 山内章)

「漆工芸から漆造形へ」
(京都市立芸術大学美術学部講師 栗本夏樹)

7月3日(土)

「絵画技法からの考察－フレスコ画の制作・研究」
(京都市立芸術大学名誉教授 山添耕治)

「美術教育と木造文化－木造和船の復元を通して」
(京都市立芸術大学美術学部教授 小清水漸)

※Vol.1「日伊世界遺産研究会」(P.8)の中で、「第3回日伊国際シンポジウム参加メンバー」から、小清水漸教授の名前が抜けていました。訂正し、お詫びします。

前回の芸大通信で報告いたしましたように、昨年11日日伊世界遺産研究会によるシンポジウムが、イタリアシエナ大学において開催されました。今回は、そのシンポジウムにパネラーとして参加いたしました京都側の参加者による、講座形式の報告会の案内をさせていただきます。

「文化遺産の保存」と言う問題には、その取り組み方に多くの方向性が考えられます。これまでは建造物や街並みのように、比較的目に触れやすい遺産の保存が言われてきました。これに対しましては、歴史的価値の学問的研究と共に、科学的保存の研究も着実に進んできております。本学におきましても、美術品の保存修復に関する研究と実践を目的とした専攻を立ち上げ、取り組んできたところ です。

また近年では、自然環境そのものを文化遺産として保存する動きが、広く認知されて参りました。地球的規模で見ればまだまだ小さな範囲の自然環境でしかないでしょうが、その保全に対する意識は、少しずつ広がってきております。

さらに昨年のユネスコの報告によれば、これからの文化財遺産の保存には、無形の文化財に対する視点が重要であるとされております。

長年人々の目に触れてきた建築や街並みが破壊され失われてしまうことは、大変に残念なことですが、それらを作り支えてきた技術や、それらのすべてを育んできた文化そのものが失われてしまうことは、取り返しのつかない事柄だけに、大きな悲しみと怒りを伴うものです。

無形のもの、失われたことの意味がすぐには理解され難いだけでなく、失われたことすら気付いていない場合もあるでしょうから、特に意識したい側面であります。本学の日本伝統音楽研究センターの存在と研究も、日本文化における重要な意味と責任を担っていると言えます。

昨年のシンポジウムにおける発表も、無形の遺産に対する視点から纏められた内容が、日伊双方ともに多かったと思います。

今回の報告会は、京都アスニーとの共催講座として開催いたしますが、講座内容は、昨年のシンポジウムで発表されたものを下敷きに行います。スライドやビデオの視聴覚的資料も多く、大変分かりやすい内容です。多くの皆様のご参加をお待ちしております。(美術学部教授 小清水 漸)

新収蔵品展にちなんで



新海玉豊
「輪廻シリーズ：飛び出した円」
181.8×91.0×19.0
1976年

平成16年度の陳列室展示予定

新収蔵品展 I

4月6日(火)～5月5日(水)(終了)

内容：平成15年度に新たに収蔵された作品の中から、西真「戸隠清晨」、山本知克「思惟の連続」、池田遙邨「熱海夜景」など、日本画と版画作品を展示します。

新収蔵品展 II

6月8日(火)～7月4日(日)

内容：平成15年度に新たに収蔵された作品の中から、新海玉豊「輪廻シリーズ：飛び出した円」、加藤正二郎「風の晩夏」など、現代の漆工と染色作品を展示します。

新収蔵品展 III

9月21日(火)～10月17日(日)

内容：平成15年度に新たに収蔵された作品の中から、呉春「三十六歌仙図屏風」、大野徹高「春蘭」「彼岸花雷写生」など、日本絵画と素描作品を展示します。

六角堂能満院仏画粉本—江戸時代の仏教図像

10月29日(金)～11月23日(火)

内容：本館所蔵の「田村宗立旧蔵粉本」の中から、幕末期に京都六角堂能満院で、仏教図像の探求と継承に専心した律僧大願らが描いた「五部心観」などの白描仏画を展示します。

この頃、大学博物館という名前も、少しずつ市民権を得てきたようです。大学が設置者となる、特殊な博物館というイメージをぬぐい去ることはできませんが、平成8年に文部省の学術審議会が「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という報告書を提出して以後、あちこちの大学でその充実に本腰を入れはじめています。

この報告書の中身は、平たく言えば「大学が持っている様々な資料をみんなで活用しましょう」というもので、大学のイメージアップにつながると考えられているせいか、国立大(今は大学法人ですね)のみならず、私学のがんばりにも勢いがあります。

私たち芸術資料館も、その大学博物館のひとつです。開館こそ平成3年と十年余り前のことですが、その原形は、昭和37年に東山今熊野校地内に建設された陳列館にありますから、四十年を越す歴史があります。こうした施設が設けられた大学としては、全国でもかなり早いほうといえます。

この陳列館は、モダンなデザインのコンクリート製建物で、2階が展示室、1階が収蔵庫となっていました。博物館施設とすればささやかなものですが、大学の博物館学課程設置にあたって、その実習場所としての役割も担っていたので、大きな期待が寄せられました。ただし、それまで、収蔵品は図書館が管理していたため、この陳列館も図書館の管理となり、残念ながら、いまだ本格的博物館として独立するには至りませんでした(このあたり分かり難いでしょうが、法律は博物館と図書館を明確に区別するのです)。

とはいうものの、大学に展示公開の場を得たことは、とても意味のあることでした。落成にあたって、大学教員をはじめ、様々な関係者からの作品寄贈があり、さながら美術館の様相を見せはじめたからです。意外に思われるかもしれませんが、この陳列館ができるまで、教員が作品を大学に遺すということは、ほとんどありませんでした。環境の変化はたちまち人の意識を変えるのです。

教員や同窓生からの寄贈は、現在に至るまで続きます。本館の収蔵品の充実は寄贈によって支えられているといっても過言ではありません。昨年も本学を退任された先生や、同窓の作家から多くの作品が寄贈されました。この4月から3回に分けて「新収蔵品展」を開催し、これらを紹介していくつもりです。皆様が多数のご来館をお待ちしています。(芸術資料館学芸員 松尾 芳樹)

アルド・サルヴァーニョ氏による声楽公開レッスン ジャコモ・プッチーニ作曲『蝶々夫人』ミラノ・スカラ座初演百周年記念



アルド・サルヴァーニョ Aldo Salvagno 氏

イタリア、サレルノ出身。ボローニャ大学音楽研究科を最優秀の成績で修了。ボローニャ音楽院作曲科卒業。指揮法をエルヴィン・アチエル氏に師事。ベネチアのロッシニ協会にて音楽文献学を修める。欧州各地の劇場でオペラ、管弦楽曲を指揮。オランダ、ドルドレヒトの「ベルカント・フェスティバル」で声楽マスタークラスを担当。現在、ヴェルチェッリ市立劇場音楽監督。

プッチーニ作曲『蝶々夫人』が1904年2月17日にミラノのスカラ座で初演されてから、今年ちょうど百年目にあたります。日本女性が主人公で長崎を舞台とする、わが国では殊に親しまれてきた作品です。またその人気を通じて、ヨーロッパ音楽の一形式たる「オペラ」への国民的関心を高めてくれた貢献も認められるべきでしょう。しかし、イタリア語を母国語とし、西洋的人文教育を受けた歌手の解釈力と技能を前提とするオペラですから、私たちにとって正確な内容理解に達し、満足な演奏を実現する難しさは、国際化や情報化がこれほど喧伝される現代であってもなお変わりません。

今回の声楽公開レッスンの講師、アルド・サルヴァーニョ氏はイタリアの指揮者で、ピエモンテ州ヴェルチェッリ市立劇場の音楽監督です。氏は、日頃から歌手たちへの演奏指導において、作品解釈を歴史的資料の研究に依拠して行う原則を貫いているのだと、僚友として通訳をつとめる私に語ってくれました。

確かに、『蝶々夫人』でも原作者たち、すなわち台本家ジャコーザ、イヅリカと作曲家プッチーニは、創作過程から初演の後まで、劇作と詩作、音楽づけ、上演、改訂などの詳細をめぐり、夥しい書簡で常に論理的な見解を述べています。作曲家がすすんで起用した優秀な歌手たちの演奏も、多くの録音が存在します。当時の評論や声楽教本は、伝統に則った演奏技術や様式についての実証的な資料です。このような情報をもとに、原作者や同時代の聴衆が望んだ演奏のありかたを可能な限り再構築し、今日の上演と直結した稽古場に応用することこそ、私たちが本来の『蝶々夫人』に接近し、これからの演奏を新たな発見の機会としてゆける道筋かも知れません。

芸術家にして音楽学者でもあるサルヴァーニョ氏を招き、イタリアのオペラ劇場でとられている声楽教授法をわが国に導入する企画。それは、百歳を迎えた日伊両国文化の橋渡し役『蝶々夫人』を課題曲として、日本文化の都、京都に本拠を置く芸術大学音楽学部とイタリア文化会館の共催で実現されます。

(『蝶々夫人』初演百周年記念事業実行委員 大前 努)

上記の「声楽公開レッスン」及び受講生の演奏発表会は以下のとおり
(声楽公開レッスン聴講、演奏発表会ともに芸大講堂にて。入場無料)
*声楽公開レッスン：2004年10月3日(日) 午前10時-午後6時
4日(月) 午前10時-正午
*受講生の演奏発表会：2004年10月4日(月) 午後6時開演

なお、上記「声楽公開レッスン」受講生選抜のためのオーディションを7月29日(木)に行います。参加ご希望の方は京都市立芸術大学ホームページ(<http://www.kcua.ac.jp/indexj.html>)または音楽学部教務課(TEL:075-334-2222)へお問合せください。

文学からの発想

～フランス国立高等装飾美術学校との交流～



ボローニャ展



パリブックフェア

京都芸大ビジュアルデザイン専攻では、フランス国立高等装飾美術学校 (Directeur de l'Ecole Nationale Supérieure des Arts Décoratifs 日本語略称:アールデコ)との交流を続けています。

交流のテーマは「文学とデザイン」です。まず、1999年に「日仏美術学生による宮沢賢治の世界展」の企画がスタートしました。この企画は宮沢賢治の作品をアールデコの学生が精読し、そこから得たイメージで原画を制作。その原画を元に京都芸大の学生が、ブックデザインするという内容です。原画とブックデザインをセットにして、2000年から2001年までに本学大学会館、京都芸術センター、福井市美術館、宮沢賢治記念イーハトーブ館での国内巡回展を開催しました。

引き続きフランスの寓話作家ラ・フォンテーヌをテーマに、今度は京都芸大の学生が原画を描きアールデコの学生がブックデザインを行う「日仏美術学生によるラ・フォンテーヌの世界展」を2002年にブックフェアとフォーマル・デ・イマージュにおいて2回のパリ展を開催しました。この展覧会では宮沢賢治の世界展の作品もあわせて展示しました。またこの企画展は2003年4月にはボローニャでも開催し、イタリアの多くの方々にもご来館いただきました。

今年度からは、アールデコと本学に加え、ロシアのセントピーターズバーグ国立デザインテクノロジー大学、セルビアモンテネグロのベオグラード美術学校が加わり、他国の文学を精読し、原画を制作、他の3カ国の学生がブックデザインを行うという企画がスタートしています。2005年には、ボローニャとパリで展覧会を行う予定です。

このような文学作品と自分達の作品、そして学生同士の直接の交流から他国の文化を学び、学生達が視野を広げるひとつのきっかけとなれればと思っています。

一昨年からは本学の卒業生2名がアールデコに2年に渡り留学中です。今年度から、さらに1名が留学しますし、アールデコからも次年度以降の長期留学の問い合わせが来ています。

気がつけばすでに5年になる交流ですが、今が長い交流のスタートとなりそうです。

(美術学部助教授 辰巳 明久)

漆工漆交

亀谷 彩



1997 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程修了

修了個展・賞歴

- 1995 日本漆工協会・漆工奨学賞
 1997 個展 京都／アートスペース虹
 修了制作展・華楊賞
 1998 個展 島根／紙舎
 1999 個展 「蓮の花今年の夏も夢の中」展
 大阪／Gallery Den
 2000 個展 大阪／GALERIE CENTENNIAL
 2001 個展 「秣」 京都／ギャラリーマロニエ
 2002 朝日現代クラフト展・準グランプリ受賞
 個展 「華毛散華」展 大阪／ぎやらり かのか
 各描く角瓶展 大阪／Gallery Den
 2003 個展 「ハレノグケノグ」展
 京都／ギャラリーマロニエ
 2004 個展 「ハレノグケノグ」展
 東京／Gallery Oculus
 個展
 「華毛を散らして祝いの宴
 春を射止めて夏へと流す」展
 京都／石田大成社ホール

グループ展

- 1996 京展 京都／京都市美術館
 芸術祭典 京
 京都／京都四条通地下ウィンドウ
 1998 京都美術工芸展 京都／京都府立文化博物館
 1999 開かれた世代展 京都／アートライフ・みつはし
 世界工芸コンペティション・金沢 金沢
 楽空間 漆芸展 京都／祇おん 小西
 アートライフ展 東京／ギャラリーセンターポイント
 2001 LIAISON展 東京／ギャラリーセンターポイント
 2002 美術工芸新鋭選抜展
 京都／京都府立文化博物館
 浮気のかたち 京都／ギャラリーマロニエ
 浮気のかたち 東京／ワコール銀座アートスペース
 2004 新鋭作家六人展 東京／ギャラリー田中

その他の活動

- 2001 松江市北堀美術館内扉制作
 ガムラングループ、「マルガ・サリ」のガムラン楽器一式裝飾塗装

漆は欧米では「JAPAN」と呼ばれているほどに日本と縁の深いものですが、国内の美術大学で漆工科を設けてあるのは稀でしょう。京都芸大でも一学年に3～5名と、地味な存在でした。ところが最近では漆工科を希望する学生が増えており、基礎の部屋などは活気があるのは楽しくも制作への支障が懸念されるところでもあります。

実は先日、芸大で永きにわたり教鞭をとられていた新海先生の退任をお祝する会が催され、卒業生が一堂に会する機会がありました。その時改めて感じたことは皆さんの活動が多種にわたり独自であること、そしてまた人数が少ない故か、上下の繋がりが深いことでした。

おそらく多くの人は大学教育の中で初めて漆芸、木工に出会い、独自の表現や活動の道を切り開いており、その多様性は人の数だけあるのではないかと思われるほどです。思い付くままに記すと、家具、建具、日用雑記に社寺のお道具、扇子の軸に現代クラフト、デザイン仕事に現代美術、文化財の修復、保存、学術研究と、実に多彩です。

そして世代を越えた付き合いの広さとして、学生の頃には秋は秋刀魚を焼き、初夏には梅酒を漬け、ある時は漆の実で珈琲や、佃煮をこしらえたり、そしてそれをあてに飲み語り皆で楽しんだものでした。また、ずっと上の先輩になると、仕事のお手伝いをさせていただいたり、その中で貴重な経験もさせて頂き、公私共々お世話になったものです。また先輩方の姿勢は大きな励みとなっています。漆にかぶれるということは『かゆさ』といった点では大変なことではありますが、その特殊な経験を共有できるという関係も、ひょっとしたら良いように働いていたのかもしれない。(稀に全くかぶれない人もいますが)新入生がかぶれると、まるで漆の洗礼を受けたかのような扱いをされるのは事実です。

去年度からは芸大にまた御縁があり、非常勤講師という立場で久々に大学に出入りしていますが、最近になってようやく大学の空気に慣れ、気恥ずかしさが薄れてきたところですが。学生は皆活気に溢れているのでその空気は私にとってもまた良い空気となっているようです。そのほか、中・高校生あるいは社会人の方々と接しながら制作し作品を見て頂き、そういった活動によって多くの縁もでき、勉強すべきことが山ほど見つかっていることは有り難いことです。

ここ数年は仕事や制作活動を通して、全く思いもよらない人との出会いや発表の機会が得られましたが、これからも予測もつかない出会いに恵まれることも楽しみの一つとして活動が続けることができればと思っています。



2003年「ハレノグケノグ」展より
 持物(木・漆・金・銀) 17×11×40cm
 残欠手(木) 20×10×7cm